日韓市民ネットワーク・なごや

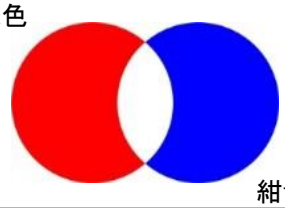
한일 시민 네트워크・나고야

会報 No. 91
2022-11-11

発 行 者 ： 後藤 和晃
〒483-8037 愛知県江南市勝佐町東郷 238
TEL／FAX　0587－56－6788

Home Page:http://home.m00.itscom.net/nikkan/index.html

朱色



紺青

目次

1	事務局通信	後藤和晃・藤野孝博
2	トピックス	事務局
3	会員の広場	会員:岩田　晋
4	事務局後記	事務局

事務局通信
사무국 통신

事務局統括幹事　後藤和晃

1　日本を愛し“大邱農民の恩人”

水崎翁の墓を守り通した徐彰教（ソ・チャンギョ）氏の遺言、実現へ！！～12 月 3 日岐阜市

会報９０号でお知らせしたとおり、“日韓市民ネット”が発足して以来、私たちが最も親しく交流した韓国人の一人が大邱在住の故　徐彰教氏でした。徐彰教氏の一家は、戦前の大邱で農業用水不足にあえいでいた農民のために朝鮮総督府と交渉を重ねた末、巨大な農業用貯水池、寿城池を造成した日本人、水崎林太郎翁（岐阜市加納町の出身で１９３９年に現地で逝去）の墓を永年、守り続けてきました。

太平洋戦争に破れた日本人が韓国から祖国へ引き上げて行った後、残された日本人の墓の殆どは反日の風潮の中で撤去されました。しかし、徐さんの一家をはじめ大邱の人々は「水崎翁は大邱農民の恩人だ。韓国人と心をひとつにして、大邱の大地に尽くした翁の墓は、なんとしても守り通そう！」と話し合い、墓前に顕彰碑を据え、周囲を桜の木で囲うなどしながら、例年４月には桜の花の下で水崎翁追慕祭を開いてきたのです。

故　徐彰教氏

墓の守り人だった徐彰教さんは、残念なことに２０１４年の６月に病のため８２歳で亡くなりました。その徐さんが永年、言い続けてきた言葉がありました。

「私たち大邱の人間は、水崎さんの恩を忘れず毎年、桜の時期に追慕祭を続けてきている。ところが水崎さんの故郷の岐阜市に行ってみると、水崎さんの名前も業績も知っている人が全くいない！だから岐阜から来た人が大邱で、こんなに素晴らしい業績を果たされたんですよ！・・・・と故郷の人が分かるよう、私が元気なうちに、水崎翁の顕彰碑を、ぜひ岐阜市に建てたいんですよ！！」と。

徐さんの口ぐせを遺言と受け止めた大邱と岐阜双方の水崎翁顕彰会が話し合った末、水崎翁の胸像を建立するための資金を集めました。

そして胸像の原型づくりは、愛知県扶桑町在住の愛知県立芸大出身の彫刻家、亀淵元昭氏に依頼、粘土像の原型が完成した時、水崎翁の曽孫の水崎元宏さんらが亀淵氏のアトリエで原型に触れました。

元宏さんは「実物の林太郎さんは、当然会ったことがありませんが、こうして胸像になると、すごく実在感があって、この人が僕のおじいさんなんだ！と実感しました。」と語っていました。

富山県の銅の町高岡市で型を取り、青銅を流し込んで黒光りする胸像として完成しており、１１月末に岐阜の会場に運び込まれます。

そして、いよいよ１２月３日（土）の１０時から水崎翁の故郷にある“加納宿まちづくりセンター”のホール内に設置した胸像の前で、記念式典が開かれます。

式典には韓国から大邱水崎翁顕彰会のメンバー３人が出席するほか、水崎翁が１４０年前に通った加納小学校の後輩たちや、岐阜市長、そして岐阜の顕彰会員や日韓親善協会、民団の人々など多彩な顔触れが集まります。

会場は名鉄やＪＲの岐阜駅からタクシーだと１０分以内で行ける所なので、会員や協力者の皆さんも、ぜひお出かけ下さい。

２　水崎翁胸像建立記念

チャリティコンサート　華やかに開催！

９月３０日（金）の夜、岐阜市内のサラマンカホールを会場に、岐阜市が生んだ偉人、水崎林太郎翁の名を、岐阜市民の心に刻み込んでもらおうという、チャリティコンサートが水崎翁顕彰会の主催で開かれました。

当日は日本を代表する男女２人のクラシックの歌手が、日本や韓国で親しまれている曲や名作オペラの多彩な調べなどを華麗に歌い上げ、３５０人の入場者たちは、「これほどまでに心に響く素晴らしいデュエットを開いたことがない！！」などとうっとりと聞き入っていました。

佐田山千恵さん

出演した女性歌手は、水崎翁顕彰会のメンバーの佐田山有史さんの娘で藤原歌劇団を代表するソプラノ歌手の佐田山千恵さんでした。

一方の男性歌手は、水崎翁の故郷、岐阜市加納町にある名門高校、加納高校出身の城（じょう）宏憲（ひろのり）さんで、音楽集団二期会トップのテノール歌手として、数々の舞台で主演してきました。

また、ピアニストの中山博之さんは、作曲家としても知られている人物ですが、奥さんが、城さんと同じ加納高校の出身者とあって、３人の出演者の全てが水崎翁やその故郷と関係の深い人たちでした。

事務局の後藤もこのコンサートに出かけたのですが、佐田山千恵さんが“日韓の心を歌う～水崎翁を偲んで～”と題して歌った歌の中に、韓国の歌として「鳳仙花」と「新アリラン」がありました。遠い昔、大邱に渡った水崎翁も現地で、このメロディーに触れていたのだろうかと感無量の思いをしました。

いずれにしても、当日、日本を代表する男女のオペラ歌手の歌声に耳を傾けた３５０人もの人たちは、心に深く水崎林太郎翁の名を刻み込んだことと思います。

この企画を思いつかれた佐田山有史さん（鳥取県米子市の実業家）と娘の千恵さん、それに岐阜市加納高校とかかわりのある音楽家、城さんと中山さん、この４人の方々に深く御礼を申し上げます。

会員・協力者の皆さんから胸像の建立のために、多くの寄付を寄せて頂きました。
１０万円、５万円など多額の寄付金を頂いた方々を筆頭に多くの皆さんから心のこもった御芳志を受け取りました。徐彰教さんに代わって、心から御礼申し上げます。

３　今こそ日韓交流を！とアピール
～ワールドコラボフェスタ～

この１０月 22 日（土）と 23 日(日)の２日間名古屋市栄のテレビ塔横のオアシス 21 を会場に愛知県国際交流協会の主催でワールドコラボフェスタ 2022 が開催されました。
私たちの会、日韓市民ネットワーク・なごやは、23 日(日)の朝 10 時から夕方まで展示ブースを設け、会のこれまでの活動や去年の実績などを紹介する一方「政府間の対話が不調な今こそ、民間交流が大切では！」と民間交流のすすめを訴えました。

やっとかめ。Neighbors　（お隣さん）！

事務局　藤野孝博

台風やコロナのため、三年ぶりの開催となった WCF（ワールド・コラボ・フェスタ）202 2は今回で１９回目。中部地域の国際交流・国際協力・多文化共生・SDＧｓへの取り組みや活動を広げ、市民、NGO・NPO、企業、行政が協力して「学び、考え、行動する場」を作りあげることを目的に開催されます。

私たち「日韓市民ネットワーク・なごや」は、日本の市民と韓半島（朝鮮半島）に居住もしくはルーツを持つ人々が自由で有意義な交流を通して、相互の理解を深めることを目的としています。

今回のブース参加にあたり、三つの柱を立てて準備しました。１）は韓国全体の理解。２）ちょっとでディープな韓国の旅３）クイズ「お札を通して知る韓国」のため、以前から資料提供等で協力いただいている韓国観光公社から韓国観光ガイドブック、韓国観光地図、チンチャコレア（最新の韓国旅行案内）を各１００部。それにブースの壁面を飾る大型ポスター３枚を提供いただきました。来場者が多く、配布物は午前中でなくなってしまいました。

２）　　では、私たちの会が韓国・大邱の灌漑に尽くした水崎林太郎を通して長年交流のある大邱市の観光協会の協力を得て、大邱観光交通ガイド、大邱観光マップを各３００部、額に入った大邱の観光ポスター３つ、さらにトラベラー・タグ３００個をいただきました。これに加え、水崎林太郎の写真、彼を描いた童話の本などを並べ、会の紹介、入会のチラシを配りました。

３）　　クイズは今韓国で使われている５万ウォン札に描かれている女性は次の３人の中の誰でしょうという問いです。○A シン・サイムダン　○B ファンジニ　○C ミン妃　これはすぐわかる人はほとんどいませんでした。そこで、韓国では良妻賢母の鑑とされ、最高額紙幣に描かれるほど敬愛されているなどヒント？を出しながら、日韓の理想の女性について話合いました。小説「８２年生まれ、キム・ジヨン」は良妻賢母を理想とする旧世代とジェンダーギャップに悩む新世代のあり様を、変わりつつある韓国を活写しベストセラーになり、映画化されました。

晴天の秋空の下、６万４千人の来場者で賑わった会場には、自他の違いを認め合い、尊重し理解しようとする空気がさわやかに流れていました。

4　曇り気味の日韓関係の中で、日韓市民ネットの活動は!?
～韓国の新聞“中都日報”の取材を受ける～

10 月 20 日頃、交流のある韓国の 130 万人都市、大田（テジョン）の市役所から電話が来ました。大田や忠清道の住民を対象にしている新聞社、中都日報の記者が名古屋の日韓市民ネットの事務局の人たちや、会員で戦前の大田に住んでいた人々を取材したいという内容でした。

背景には、日韓関係が灰色と言われる今の時代に、会をリードするメンバーや、かつての大田の住民は、今、何を考え、どんな活動をしているかを知りたいという記者の狙いがあるようでした。

イム記者　親子

あっという間に約束した 11 月 2 日（水）が来て取材を受ける場所、国際センターの交流室に中都日報のイム・ピョンアン記者が通訳のペク氏を連れてやってきました。（正確に言うとイム記者が“この子の将来にきっと役立つだろう”と 10 歳で小 4 の娘さんスビンちゃんを伴っていたので 3 人と言うべきかもしれませんが・・・）

一方、この日、取材を受けたのは、事務局の後藤、藤野、早間、岩田の四人と顧問の 李尚勲氏の 5 人でした。

会の方からは、まず 1997 年に李尚勲氏が名古屋国際センターで韓国人として初めて民間大使に就任し、1 年間多彩な切り口で韓国理解講座を開いたのが、きっかけとなって、講座の参加者を中心として会が誕生したと説明しました。

さらに歴史的にも文化的にも近い両国が、民間交流を継続していくためには、双方の学生交流団が“ワッタ！カッタ！”（来たよ！行ったよ！）を繰り返し、相手への関心を高め、理解を深めることが必要だと考えました。

そして、これまで十数回にわたって韓国の各都市から交流団を招き、奈良一泊旅行のプレゼントと３泊４日のホームステイを提供してきた実績を紹介しました。

「交流団の招致で、どんな成果がありましたか？」とイム記者が質問した際には、早間敏夫氏が 2018 年にテジョンの交流団の女子学生を 3 人、ホームステイで受け入れた際の自分の経験を話しました。

早間宅にステイした 3 人のうちも 2 人は、日本語も話せて日本に対する理解も深かった反面、一番若い女子学生は日本語も話せず、歴史問題などを背景に日本人に対して心を開くのが難しかったようでした。しかし 3 泊の後、帰国してから送ってきた彼女の日本訪問記では、ホームステイした 3 日間の早間夫婦と拙い日本語や手まねを交えての対話を重ねた結果、二人が裏表なく歓迎してくれたことを実感し、日本人に対する警戒心が融けて行き、日本人をもっと知ろうとする決意を固めたとありました。彼女の訪問記は、藤野氏がまとめた訪問記集に入っていて現場でも見ることができたので、イム記者は、充分、納得できたようでした。

また学生交流団の招待以外にも、会員を対象に毎年、日韓交流史講座を開いたり、その成果の上に、韓国各地や古代の高句麗や渤海の故地である旧満州（中国東北部）にまでも歴史紀行を、度々行ってきたことなど理解してもらいました。

また、戦前、大田に住んでいた人としては愛知県江南市在住の辻淳さん（84 歳）宅を訪問してもらい、7 歳まで住んでいた大田の我が家や山荘、そして店で働いていた韓国人の人たちとの思い出などを語ってもらいました。

醤油の醸造をはじめ不動産など様々な業種に秀でていた父親の万太郎さんは、日本人と韓国人と一切、差別する人でなかったことや、敗戦後、「許されれば韓国に帰化して、好きな大田で過ごしたい・・・」と言っていたことなど涙ぐみながら紹介されました。

辻　淳　さん

さて、全ての取材を終えたイム記者が別れる際「後藤さん、これは水崎翁の胸像を建てるために使ってください。 ほんの少額で恥ずかしいですが・・・」と言いつつ、白い封筒を差し出しました。驚きましたが、イム記者は水崎翁の故事をよく知っていた上に、我々が今年の 12 月 3 日に翁の胸像を岐阜 に建てることを聞き、少しでも寄付をしようと決心されたようでした。

私たちも、イムさんの“韓日交流の志”なのだから、快く受け取ろうと思ったものでした。イム記者の志は、その後、水崎翁顕彰会の会計である曽孫の水崎元宏さんに手渡しておきました。

돗피쿠스 トピックス

東洋一のダンサー“崔承喜”研究会発足
～願いは伝説の舞姫の映画化～

昭和の初期、川端康成や今日出海など日本を代表するような作家や文化人たちが「彼女こそ日本一いや東洋一の舞姫だよ！！」とこぞって熱い視線を送った女性がいました。

1913 年、ソウルに生まれた朝鮮人女性崔承喜（チェ・スンヒ）で、彼女は 10 代で日本に渡りモダンダンスの先駆者と言われる石井漠に 3 年間学びます。その後、数年間、故国と日本を行き来しながら朝鮮の舞踏の真髄とモダンダンスを融合させた「蝶のように舞い、火花のように踊る！」崔承喜の世界を完成させたのです。

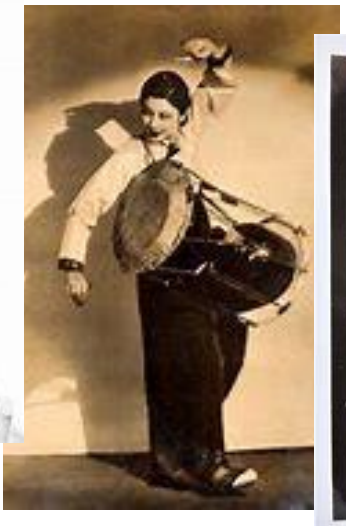
当時の世界的な舞踏家　イサベラ・ダンカン に匹敵する踊り手と激賞されることになり、「半島の舞姫」という名声が定着していきます。

昭和 20 年の日本の敗戦後、韓国で「親日派」の批判を浴びるようになった彼女は活躍の場を北朝鮮に移します。そしてロシアや中国、東欧諸国まで令名を馳せる世界の舞姫となったのです。

今日の日本では、全く忘れられているように見える崔承喜（チェ・スンヒ）・・・しかし民族の伝統とモダンダンスを融合させたスンヒの舞の影響は、今もアジア世界に広く、深く残っていると考える人たちが、東京に集合、10 月に研究会を発足させました。

仕掛け人は“日本・コリア・在日をつなぐ”相模原共同代表という李春浩さんで、この人は若い頃、映画界で働き撮影助手やカメラマンとして、経験を重ねていました。その後、韓国家庭料理の店を経営する中で、戦前の韓国の美術工芸の保存に尽くした日本人を描いた映画“白磁の人”の制作の発案者となりました。

研究会には、崔承喜の生涯に強い関心を持っている日韓の大学教授やメディア関係者、韓国の文化勲章受章者の美術評論家や一人芝居の俳優までが名前を連ねています。
果たして映画化が実現するのか！？長い目でしっかり見守っていきましょう。



崔承喜役

ハ・ジウオン

文豪・川端康成は「モダン日本」が 1934 年の正月號にインタビューされた時、女流新進舞踏家の中で日本一は誰かと聞かれ、「洋舞踊では崔承喜であろうと、私は答えておいた」中略「例えば、同じ石井漠氏門下の今の花形にしても、石井みどりの優雅典麗がすぐれているか、石井美笑子の明朗華麗がまさっているか、崔承喜がよいかは、見る人々の好みによるほかはないかもしれないし、将来の成果だけがほんとうの審判をしてくれるだろう。なぜかと云うと第１に立派な体である。彼女の踊りの大きさである。力である。それに踊り盛りの年齢である。また彼女１人にいちじるしい民族の匂いである。わたしは何の躊躇もなく、崔承喜が日本一であると答へたのだった。」
川端康成にして「日本一の踊り子」と言わしめた、崔承喜の踊りと波乱万丈の人生をドラマティック映画化することに意味と意義を感じます。

老人留学生の韓国との不思議な縁

会員　岩田　晋（堺市）

私は愛知県江南市の出身で、会の事務局長の後藤和晃さんとは、私が同じ中学校の後輩という縁があります。後藤さんは放送局で働いている時期に韓国の人々と縁が生まれ、交流を重ねているそうですが、今回は私と韓国との縁をお話しします。

私は、大学を出た後、関西で就職、永年、大阪の堺市に住んでいましたが、40 年近く前の 1983 年から大阪 YMCA の会員になっています。

会員になって間もなく韓国ソウルで YMCA の国際大会があり出かけたところ、さっそく韓国人の親しい友人ができました。

その後「どうせ韓国の人々と付き合うのなら、韓国語で仲良く会話したいもの」と考え、少しずつ韓国語を学んでいきました。

そして、退職した時期に一念発起して韓国ソウルにある名門大学　高麗大学に「老人留学生」として留学、韓国語と韓国の歴史をしっかり学ぶことにしました。(思いがけず、留学は足かけ 6 年もかかってしまったのですが・・・)

ＹＭＣＡ交流センターオープンの式典
このセンターでボランテイアをすることになりました

さて、まず、最初は下宿探しを始めたのですが、当方が、初歩の韓国語しか話せない日本の老人とあって、下宿の主人たちが、まともに相手にしてくれません。「日本の老人では駄目なのかなー」と気持ちが落ち込んだものの、４軒目の下宿屋のアジュモニ（おばさん）が、やっと話に応じてくれました。韓国語や韓国の歴史を時間をかけてしっかり学びたいことを話すと、アジュモニの表情も和らいできて、「下宿 OK」 という雰囲気になってきました。話を続けている間に戻ってきた彼女のご主人は大工さんで、その昔、日本人の先輩から教えられたのか日本語が少しできて、巻尺（まきじゃく)、秤（はかり）などと大工用語を口に出しました。

（アジュモニは人柄が良さそうだし、ご主人は日本人とのいい縁の記憶を持ち続けているようだ・・・）と私も縁を感じここに下宿することに決めたのです。

高麗大語学院卒業の日に(両端が教師)

そして、高麗大学の入学試験をギリギリ、パスして大学に通い始めました。 韓国語の授業は問題はなかったものの、難関は史学の講座でした。かなり年老いた史学の教授の授業は聞き辛くて、
内容を理解するのが大変でした。しかし私は不思議にも韓国との縁が強いようです。

まもなく同じ史学の講義を受けている女子大生との縁が生じ、彼女が韓国語会話の相手から史学の授業のバックアップまで助けてくれるようになったのです。

この女子大生を私はトウミ（お手伝いさん）と読んでいましたが、彼女との縁が生まれたきっかけは彼女の弟に関する頼み事でした。ある日彼女が私に近寄ってきて「岩田さん、高校生の弟が日本語の会話ができる相手を探しているんです。お願いできれば嬉しいんですが・・・」と頼んできたのです。

「そんなことならお安い御用です。協力しますよ！」と応じたのが縁になって、以後、彼女は私の韓国語の先生になり、さらに史学の授業のバックアップまでしてくれるようになったのです。

そんなある日、私は急に体調が悪くなって大学に欠席の連絡をした上で、下宿で一日、寝込みました。すると下宿のアジュモニが「岩田さん、お客さんですよ！」と案内して来てくれたのがトウミでした。

トウミは、なんと同級生数人と相談した上でおかゆやみかん、ホットまんじゅうなど定番の病人用のお見舞いを友人代表として届けに来てくれたのです。「病気の日本人のお年寄りをほっておいては、高麗大生の名が廃(すたる)る！」とみんなが言っているんですとトウミは笑っていました。

彼女だけでなく、他の大学生たちまで小遣(こづかい)いを出し、お見舞いをしてくれたとあって、彼女が帰った後、思わず涙ぐんだものでした。

トウミは、この後も様々な場面で私を助けてくれました。特に卒業論文を書くときも全面的にバックアップしてくれたことも忘れられない思い出です。

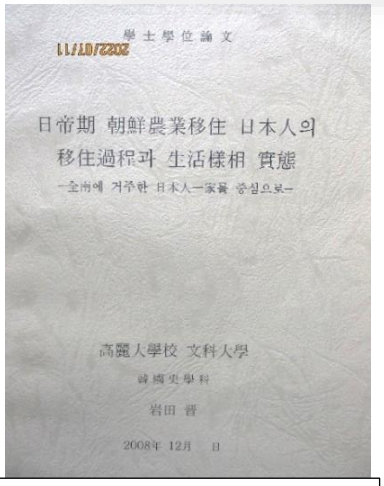
もっと書きたいのですが、今回はこのあたりまでにしておきます。いずれ、大学の卒論のテーマに何を選んだのか、トウミとのその後の家族ぐるみの交流のことなど次の機会に書かせてもらいます。

トウミが京都へ

卒論作成のために全羅南道へ

土曜日ごと、この建物へ通いました

古都で和菓子作りを体験



トウミガ添削してくれた卒論

（写真提供：池　貴巳子氏）

韓国民画家　池　貴巳子の作品

事務局後記
사무국후기

11 月 2 日から 3 日にかけ、韓国テジョンの新聞社への対応を終えた翌日、なんと大学生交流団を何回も引率してこられた光州の弁護士、姜幸玉さんが愛知県の弁護士会との交流会で来名されました。この日の夜、名古屋の居酒屋で藤野氏と 3 人で楽しく交流しました。